

沖縄県における末期腎不全発生の性差の動向とその背景因子

普久原 智里:1 古波蔵 健太郎:2, 井関 邦敏:3

1:琉球大学大学院医学研究科循環器・腎臓・神経内科学,

2:琉球大学医学部附属病院血液浄化療法部 3:沖縄心臓腎臓機構

わが国の末期腎不全発症率は増加傾向にあり, 末期腎不全への進展予防は喫緊の課題である.

末期腎不全の発症率には性差があることが報告されている. 背景因子として性ホルモン, 一酸化窒素代謝, 酸化ストレスへの耐性, 併存症や生活習慣に関連するリスクの性差などが想定されているが, 疫学的に検証した研究は少ない.

日本透析医学会の報告では 2019 年度の新規透析導入患者数は男性 26,731 人, 女性 11,825 人と, 男性は女性の 2 倍である. さらに男性の新規導入患者数はここ 20 年で 3 倍に増加している一方, 女性は横ばいであり, 新規透析導入患者数の性差は年々拡大している. この性差の拡大は, 末期腎不全の原疾患や生活習慣に関連するリスクの性差のみでは説明できない可能性がある. 透析導入率(acceptance rate)は末期腎不全の発症率(incidence rate)とは必ずしも同一ではない.

沖縄県では, 患者の県内外の移動が比較的少ないという利点を活かし, 全ての透析施設の協力を得て県全域を対象とした慢性透析患者の臨床疫学研究を実施している. 沖縄透析研究(Okinawa Dialysis Study:OKIDS)では, 末期腎不全と診断され透析導入後 1 ヶ月以上生存した患者の性別, 年齢, 基礎疾患などを登録している(Kidney Int 61:668-675, 2002). 本研究では OKIDS 登録データベースを用い, 1971 年から 2020 年までの 30 年間における沖縄県での透析導入患者(N=5,246;男 2,981, 女 2,265)について, 発症率の年度別推移及び背景因子を国勢調査による沖縄県全域の人口動態による補正も行い検討する.